

玄智教学の研究

『考信録』を中心とした行信論

掬 月 即 勝

はじめに

江戸中期から後期に活躍した、浄土真宗本願寺派の学匠玄智景耀（一七三四—一七九四）の教学を総合的に研究することを目的としており、本稿では玄智の名著『考信録』を中心として、断片的であるが、行信義解釈を検討する。

玄智は僧樸門下⁽¹⁾ながら学林の学匠ではなく、本願寺の御堂衆や輪番等の堂職を務めていた事績や、浄土真宗の一大史書『大谷本願寺通紀』を著した宗史家としての評価は高いが、それに比して宗学者としての認知評価はいささか低く、先行研究も非常に乏しい。そこで、真宗の実践論が明示されている『考信録』を糸口に行信論を考察し、宗学者としての実像を探る一助としたい。また、玄智晩年の集大成『顕浄土真実教行証文類光融録』（以下『光融録』）は、『六要鈔』を基底として先哲の諸説を網羅し自己の識見をもって比較研究したもので、後学から「本典註釈中の白眉」とも称される⁽²⁾。

一 『考信録』について

『考信録』は玄智が江戸築地別院の輪番在任中に完成したもので、安永三年（一七七四）の作といわれている。仏教の日用行事や勤式作法の本拠を考究し、兼ねて教義に言及した書で、今も「浄土真宗の百科事典」として用いられ、現代の真宗教学、布教伝道にも大変、有益なものといえる⁽³⁾。

本願寺所蔵の写本⁽⁴⁾（六巻本）を底本としたものが『真宗史料集成』（以下『集成』）九（同朋舎、一九七六）、明治の刊本（五巻本）を底本として写本を用いて校合・改訂されたものが『真宗全書』（以下『真全』）六四（藏経書院、一九一四）に収められている。この底本の相違により、『集成』と『真全』では、『考信録』の巻数と項目数が異なっている。

二 『考信録』にみられる行信義解釈

『考信録』の項目名のうち、行信にかかわるものはいくつ

か散見されるが、今回は卷三の「信後称名」「獲信方便」「称名具徳」「業成時日」について取り上げる。⁽⁵⁾

(一) 信前の称名

『考信録』卷三「獲信方便」に、

すべからく仏祖に哀請し、専心に称名すべし。これ獲信の薬石なり。…又至徳の尊号は信心の体なり。これを称念すれば、自然に信海に帰入すべし。吉水等師、行を本と勧めたもうものこれなり。…又弥陀の名号唱えつつ、信心まことにうる人はの和讃も、多義ありと雖も、まずは行より信を生ずるの次第にして、長時称名のうちに信心を獲るの相なり。御消息集左四報性信書曰。往生を不定に思食さんは、まず我身の往生を思食して御念仏候べし。我身の往生一定と思食さん人、御報恩の為に御念仏候べし。取詮これ未信の人、往生の為に念仏すれば、終には信を發して、往生業成の地に至るべしとの慈教にして、いわゆる方便の真門を出でて、選択の願海に転ずるの次第なれば、ただ教他のみにあらず。祖師の親践するところもまた爾なり。…但しかくいえばとて西鎮家の口称ばかりを本として、信の得不得を論ぜざるとは、同日の談にあらず。畢竟信を本として、その具不を論ずるより、獲信の方便を示すのみ。⁽⁶⁾

と、法然・親鸞の文等を引証して、信前の称名を強く勧めてゐる。ただし、浄土宗の西山義・鎮西義のような口称念仏を根本最要として信心の有無を語らない立場とは同日の論ではなく、詮ずれば、信心を根本最要として、その信心の有無を確認するためにも、獲信の方便である信前称名を示したに過

ぎなかった、と結ばれている。

『光融録』卷五⁽⁷⁾では同様の文に加え、法然の三生果遂の文を引証して信前称名を勧励し、信前の行の所属は機によって第十七願と第二十願の両者があると、最後に補足している。

(二) 信後の称名

『考信録』卷三「信後称名」に「近來宗徒の中に、一念業成を惡執して、多念相續を撥無し、念仏は西鎮家所作の如くに思い、終日放逸懶惰にして、自障々他する輩多し。…かの僻解の輩の実踐を尋ねれば、長日に一遍の称名も勤めざるとは、霄壤懸隔せり」と、冒頭から、信の一念に浄土往生の業因が成就し往生が定まる一念義に固執し、多念にわたり称名念仏が相續されていないと、当時の宗徒に対して痛烈な批判を掲げている。『考信録』卷三「業成時日」にも「一念帰命すとも、長時の称名を廢し、そのまま打捨たる類は、眞の獲信には非るなり⁽⁹⁾」と諫止している。

『光融録』卷五⁽¹⁰⁾においても、信後の称名はすべて第十八願の所行法体に帰するものであり、親鸞は一念業成を本とするが、多念を廢したわけではないと述べ、法然の文も引証して多念を廢する一念義を誠めている。

(三) 信後の行

『考信録』卷三「称名具徳」には、
信後多念の称名をば、或は化他大悲の行ともいい、或は往生の正

定業ともいい、或は讃嘆門の行ともいい、或は報恩の業ともいえる。南無阿彌陀仏の行体の具徳は、何れにも通ずべし。局分すべきにあらず。…往生の業に非ずということにはなきなり。一念よく多念を出し、多念全く一念に帰す。故に命促れば一念にして往生し、命延れば自然と多念に及ぶ。然れば一念多念同じことなれば、一念已に往生の業となる。多念何ぞ往生の因に非ざらんや。この理ありと雖も、新たに生因に擬するといふには非ず。末弟分上に於ては、ただ祖誥を奉じて、受行をするのみなり⁽¹¹⁾。

と、『光融録』卷五と同様に、一念多念は同体であることから、信後称名は化他大悲の行、正定業、讃嘆門の行、報恩行として、すべて法体の具徳である、と解している。

(四) 一念覚不論

『考信録』卷三「業成時日」に、

今も漸頓の二機ありて、頓機は獲信の時を知べし。漸機は知べからず。…頓機とは宗祖の始めて吉水に謁したもうの日、立処に真心を決定し在すが如きはなり。その外、臨終回心往生の機またしかり。最初聞法の時、直に獲信すれば、獲信時知りぬべし。漸機とは会て聞法し帰命し、又念仏すと雖も、或は信じ或は疑て、しかと会得することもなかりしに、仏力冥に加被して、いつとなく疑尽て往生一定、貴や難有やと信をえて、歓喜念仏するの安心になる。是凡夫情慮の及ばざるところ、何ぞまた何の時日獲信ということを記すべけんや⁽¹³⁾。

と、信一念の覚不において、「頓機」(信心を獲た時を知ることができない)と「漸機」(信心を獲た時を知ることができない)の二

種の機根があるとする。親鸞や臨終回心往生の機は「頓機」になるが、多くの人は「漸機」であり、詰まるところ、凡夫の所見が及ぶところではない、と論じている。

(五) 信心の確認

『考信録』卷三「業成時日」に、

烟を見て火を知る如く。疑亡じ喜生じ、念仏勇進するに由て、信をうることを此知す。…たとえば口伝鈔の説、夜の明るは日の出るが故なり。未曙先看海底日 然れども常人の見を以て、夜明の時の日出をば観べからず。ただ日の山頂に出るを見て、始めてこれを知が如し。一念業成は、天明の時の日出なり。凡見の所及に非ず。多念相続にて始て業成を知るは、日の山頂に出るを見て、日出を知ると同じ。偈云。慶喜一念相應後、与韋提等獲三忍と、此有異解 讚曰く、一念慶喜する人は、往生必ず定りぬと、慶喜の左註云。信をえて後に喜ぶとなりと、これみな後時の慶喜を以て、一念の業成を驗知するに非ずや。…畢竟は此量知にして、信心の定るを以て往生の定る知り、又念仏の相続を以て信心の定るを知るといふべし⁽¹⁴⁾。

と、凡夫の所見が及ぶところではないが、「夜明けのときの日の出」(信心を得て往生が定まる)と「日が山頂から出る」(念仏が相続する)例えも挙げながら、疑いがなくなり喜びが生まれてくることと、念仏の多念相続によって、信心を得ることを知ることができるのではないか、と提示している。

『光融録』卷十四⁽¹⁵⁾にも、曇鸞・善導・法然・親鸞の文を引証しながら、天台・真言・禅などの仏教各派が常念を尊ぶの

は真宗の行にも通じるゆえ、念仏の多念相続をもって獲信を確認すべきである、と説示されている。

おわりに

『考信録』と『光融録』の行信義解釈は非常に類似しており、特筆すべきは、信心を根本最要としたうえで、信前信後とも専心念仏の実践を強調していることである。「信前の称名」「信後の称名」「信後の行」では法然の文を引証し、教格論にもかかわってくる。「信後の行」を化他の行・正定業・讃嘆門の行・報恩行として、すべて法体の具徳と解していることは報恩論の問題であり、行信論を知るうえで重要な手掛かりとなった。今後の課題として、当時の時代背景も押さえつつ『光融録』を基底に玄智行信論の解明へとつなげたい。

なお、「一念覚不説」には頓機と漸機の二種の機根があることを論じ、「信心の確認」では疑いがなくなり喜びが生まれてくることと念仏の多念相続によって獲信を確認すべきであると提示している。これらは現代の真宗教学、布教伝道の在り方にも有意義な示唆を与えてくれるものと考えられる。

- 1 同門に慧雲・仰誓・僧鎔・大同がおり、後に芸州・石州・空華・筑前などの諸学派が形成された。

- 2 前田慧雲『本願寺派学事史』（『真宗叢書』別巻・六五七―

六五八頁）には、『教行証文類』「行巻」の解釈について大半が核心に触れないのに対して、『光融録』は『六要鈔』の能行説を承けて明快に行論を展開し、従来、折衷能行説といわれてきた僧叡・興隆の行信論の基礎を築いたとまで指摘されている。

- 3 深川宣暢「真宗における伝道教材の研究——『叢林集』と『考信録』——」（『真宗学』一〇二、二〇〇〇、六頁）にも、「内容的に現代においても資料となり、また伝道・布教の本格的な辞書・事典ともなりうる」と評価されている。

- 4 土山年雄『玄智余景』巻一（慶證寺、一九九三、三一頁）では、自筆本・写本・刊本について言及されている。

- 5 以下、引用する『考信録』は『真全』六四を底本とするが、句読点は『集成』九を参照しながら筆者が訂正した。

- 6 七九上―八〇下頁、五〇四上―五〇五上頁（『真全』六四・七九上―八〇下頁、『集成』九・五〇四上―五〇五上頁の意。以下、『考信録』に関しては同様に表記する）。

- 7 『真全』二四・八三上頁。

- 8 七四下―七五上頁、五〇〇下―五〇一上頁。

- 9 八六上頁、五〇九下頁。

- 10 『真全』二四・八四下頁。

- 11 八二上―下頁、五〇六下頁。

- 12 『真全』二四・八三上―八四上頁。

- 13 八五上―下頁、五〇八下―五〇九上頁。

- 14 八五下―八六下頁、五〇九上―五一〇上頁。

- 15 『真全』二四・三七四上頁。

〈キーワード〉 玄智、『考信録』、『光融録』、行信

（龍谷大学大学院）